

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	広島県	番号	7
-------	-----	----	---

推進地区名	推進校名	児童生徒数
尾道市	尾道市立久保小学校	188
	尾道市立久保中学校	188

○ 調査研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 推進体制

広島県教育委員会は、有識者（大学教授等、義務教育指導課長、主任指導主事、担当指導主事）で構成される学力向上推進協議会を組織し、尾道市教育委員会に対して、本事業の円滑な実施のために必要な指導・助言、支援及び本調査研究の成果等の検証・普及を行った。

(2) 具体的な取組

- ① 推進校は、学力向上推進協議会における推進計画等に基づき、具体的な研究課題を設定し、推進地区において、研究授業及び研究協議会を開催し、各種学力調査等の分析から当該指定地域内において課題とされた内容等を踏まえた授業改善を図った。
- ② 学校横断的に教科の実践的な研究に取り組み、学力向上の成果及び課題について、評価問題及び調査問題の実施等により検証を行った。
- ③ 研究にあたっては、「ひろしま」学びのサイクルに基づき、知識・技能を活用する学習活動の充実を図り、学習指導要領に示されている学力の三つの要素である確かな学力の育成を図った。
- ④ 学習につまずきの大きい児童生徒に対しては、知識・技能を活用する学習活動の充実を図ったり、スクールカウンセラーと連携した教育相談活動の充実を図ったりした。

2. 推進地区における取組

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ① 推進地区協議会における推進計画に基づき、研究授業及び研究協議会を実施した。その際の研究授業は、各種学力調査等の分析から課題とされた内容等を踏まえた内容とした。
- ② 久保小学校では算数科を中心に、また久保中学校では全教科で学校横断的に実践的な研究に取り組むよう指導した。学力向上の成果及び課題については、評価問題及び調査問題の実施、及び個人カルテに抽出した児童・生徒の変容等により検証するよう助言した。
- ③ 研究にあたっては、知識・技能を活用する学習活動の充実を図り、（1）基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組、（2）学習意欲の向上を図る取組、（3）つまずきの大きい児童・生徒への効果のある指導の工夫を柱として取組を展開した。
- ④ 授業の冒頭で「つけたい力を明確にする」とことと、授業の終末に「評価問題」を実施し、学習内容の定着の見取りを確実にを行うよう指導した。

(2) 学習意欲の向上を図る取組

- ① 発達段階を考慮した学習規律を確立し、授業における指導の一貫性を図るよう指導した。

- ② 家庭学習の内容と授業内容との関連を図るとともに、保護者と連携した家庭学習の指導等を行うよう指導した。
- ③ Q-U学校満足度調査の結果や個人カルテを活用して、児童・生徒に対する支援や手立てを明確にすることで意欲をもって学習できる授業づくりを推進した。
- ④ 教科指導と生徒指導の一体的な取組による授業改善を図るために、生徒指導の三機能を意識した授業づくりを行うこととした。

(3) つまずきの大きい児童・生徒への効果のある指導の工夫

- ① 学習への意欲付けを図るために教材、教具や場面設定を工夫するよう指導した。
- ② 学習過程の可視化を行う等、視覚的な支援を充実させるよう指導した。
- ③ スクールカウンセラー等との教育相談活動の充実を図り、専門的な立場からのアドバイスを指導に生かしていくようことを推進し、指導・助言を行った。

3. 推進校における取組

【久保小学校】

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ① 久保小学びのサイクル（図2）による授業づくりを行った。
- ② つけたい力を明確にし、その力をつけるための言語活動を位置付けるとともに、言語活動を行うための発問や指示を、より具体的に行うようにした。また、目指す児童の姿を明確にし、目指す姿に近づけるような指導や支援を行った。
- ③ 伝え合い活動のねらいを明確にして、話し合わせ、伝え合い活動（ペア、グループ、全体）の充実を図った。

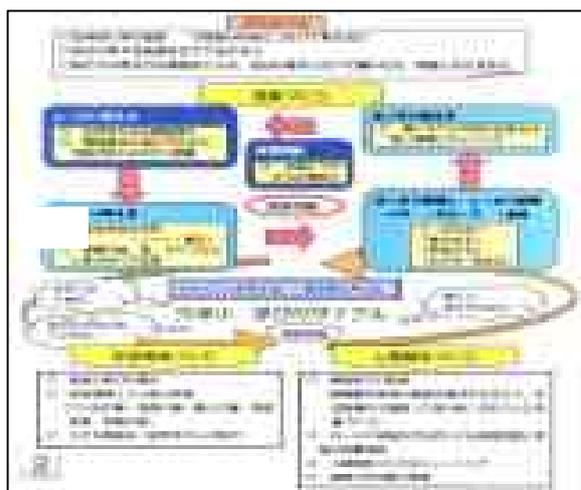


図2 久保小学びのサイクル

(2) 学習意欲の向上を図る取組

- ① 生徒指導の三機能（久保小版）を生かした授業づくりを行い、授業研究の中で出た意見や方策を基に、具体的な言葉がけなどを「教師の姿勢と指導10」としてまとめ、活用した。
- ② 児童一人一人の課題に応じた指導・支援を行うために、個人カルテを作成し活用した。
- ③ 低学年・中学年が高学年の授業の伝え合いの場面を参観し、学習に対する姿勢や伝え合いの様子を学ぶ子ども参観日を実施した。
- ④ つけたい力を明確にして、それを見取る評価問題を作成し実施した。評価問題は、45分間の中で行い、つまづいている児童には、なるべくその時間に指導・支援を行うようにした。

(3) つまずきの大きい児童生徒への効果のある指導の工夫

- ① 学力の定着状況に応じた個別指導の充実として、トレーニングタイム・もくもくタイムを実施した（下の表を参照）。

表 トレーニングタイムともくもくタイム

	トレーニングタイム	もくもくタイム
8:25～8:35 月・木・金（算数科） 式と計算・図形 量と測定・数量関係 水（国語科） 漢字・ことば・視写 音読	算数大会 ※学期の終わり ※10分間で行える問題で、80点以上を目標に取り組んだ。 ※実態に応じて、同じ問題を何度か練習をして行った。 (80点以上を点数することで、自信や意欲を持たせた。) → 2学期の結果 80点以上 82% ※賞状 80点以上 合格賞 80点未満 努力賞	木曜日 放課後の30分間 ※個別指導

- ② 視覚支援の充実として、学習の見通しをもたせたり、学習したことを整理したりするために視覚支援の工夫を行った。

- ③ 基礎学力を定着させるための家庭学習の充実のために、家庭学習の内容や仕方を手引きとして示した「家庭学習の手引き」を活用して取り組ませた。

【久保中学校】

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

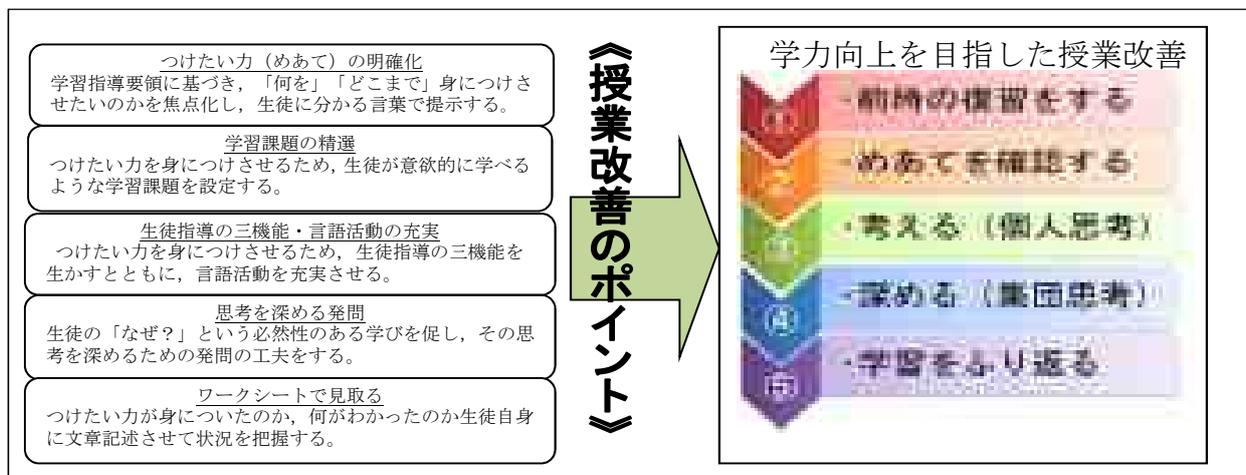


図3 久保中授業スタイル

- ① 全員がねらいを達成できるための授業スタイルの確立 (授業モデルの進化) を行った (図4を参照)。各授業における「つけたい力」を明確にし、小中の共通授業スタイルとして授業の構成・学習過程等の確立を図った。
- ② 生徒に分かりやすい言葉で「めあて」を提示し、終末に授業の振り返りをさせるとともに、授業の流れが分かるよう視覚支援を図った。
- ③ ペアトークやグループ活動等、生徒が知識や技能を活用する学習活動の場を意図的・計画的に取り入れ、言語活動の充実に向けた生徒主体の授業づくりを行った。
- ④ 基本的な学習内容を生徒自らが認識するとともに、学習意欲を喚起するための「久保中検定」を設けた。今年度は英語科で、1級から40級までのレベルを設け実施した。
- ⑤ 個々の理解度に応じた家庭学習の工夫として、「家庭学習のポイント」を示し、学習ノートの作成や活用の在り方について個別の指導を行った。

(2) 学習意欲の向上を図る取組

- ① Q-U学級満足度調査のデータを活用した個人カルテを作成した。「個人カルテ」の内容構成は、学力調査や定期試験等の成績データ、小学校時から現時点までの学習、生活状況や家庭での様子、そして、Q-U学級満足度調査において生徒指導の三機能に関連性の高い質問項目を整理したものとした。個人カルテは、全教職員が情報を共有した。
- ② 個人カルテを活用した個への支援の充実として、Q-U学級満足度調査において生徒指導の三機能に関連性の高い質問項目を整理したものを学習指導案に記述し活用した。
- ③ 小中一貫した授業スタイルとして共通の学習規律の確立を図るとともに、生徒が見通しをもって主体的・自律的に学ぶことができるよう、生徒の発達段階を考慮した指導を徹底した。
- ④ スクールカウンセラーを活用した教育相談活動の充実を行い、スクールカウンセラーのカウンセリングを通して授業に対するストレス耐性やコーピングスキルの向上を図った。

(3) つまづきの大きい児童生徒への効果ある指導の工夫

- ① スクールカウンセラーのアドバイスや、Q-U学校満足度調査の結果から、つまづきの大きい生徒に対する課題を明らかにして具体的な手だてを講じた。
- ② 少人数指導において個人カルテの記載内容を基に、生徒の人間関係を考慮したグループやペアを編成し、発問の工夫、机間指導での声かけなどの形成的評価に生かした。
- ③ ワークシートや家庭学習プリント等は、個々の理解度を考慮して作成し適宜個別指導した。

- ④ 生徒が見通しをもって主体的に学習活動に取り組めるように、学習過程を視覚化する等、生徒の理解度を高める教材、教具等の開発・活用を図った。

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

【久保小学校】

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ① 第4学年で実施している学力定着実態調査結果を4月と1月と比較すると、国語、算数とも通過率が上がっている(図4, 5)。この結果から、基礎的・基本的な知識・技能の習得はおおむねできていると考えられる。

② 思考力・表現力の育成

説明する手立ての3項目(①図や表・グラフ・式を使って説明, ②既習事項を基に思考, ③解き方のわけを思考)については、どの項目も肯定的な評価をした児童の割合は6割を超え(図6)、数学的な考え方の単元テストでは、60点未満の児童の割合が30%から19%へと11%減少した(図7)。

また、年間を通して、図の描き方や説明の仕方について指導し、ノートの充実が図られた。例えば、図はかけているが説明がない状態から「まず」「つぎに」の言葉を使って、順序だてて説明を書いている状態、友だちの意見から学んだことを具体的に書いている状態へ記述内容が変容した。これらのことから、授業の中に言語活動を仕組むことや個別の支援を行うことは、思考力の向上に有効であったと考えられる。

(2) 学習意欲の向上を図る取組

学習意欲に関しては、図8の「①新しい問題を解いてみようと思う」と回答した児童の割合が80%近くになっている。また「③質

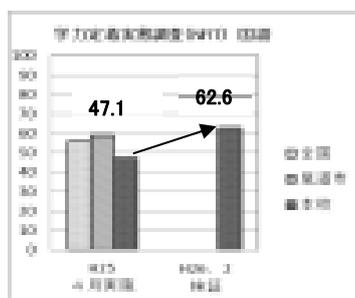


図4

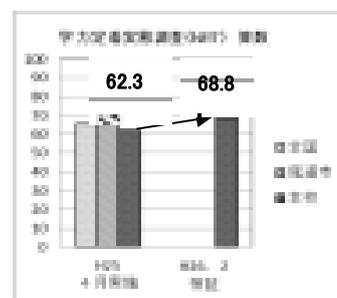


図5

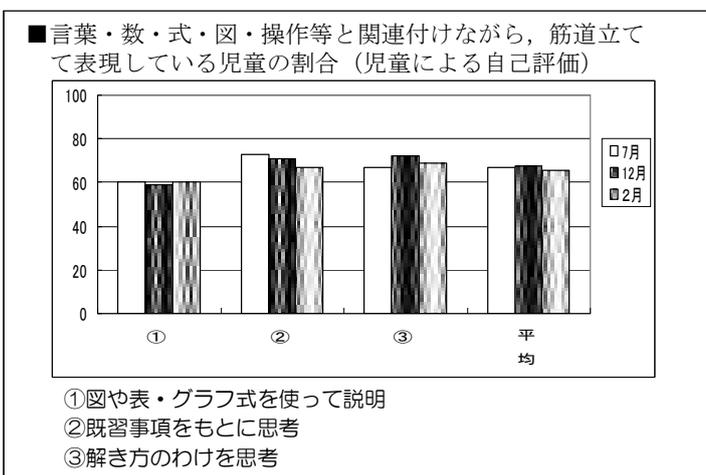


図6

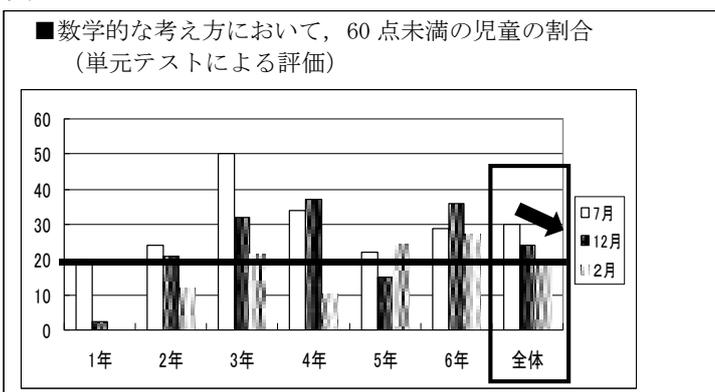


図7

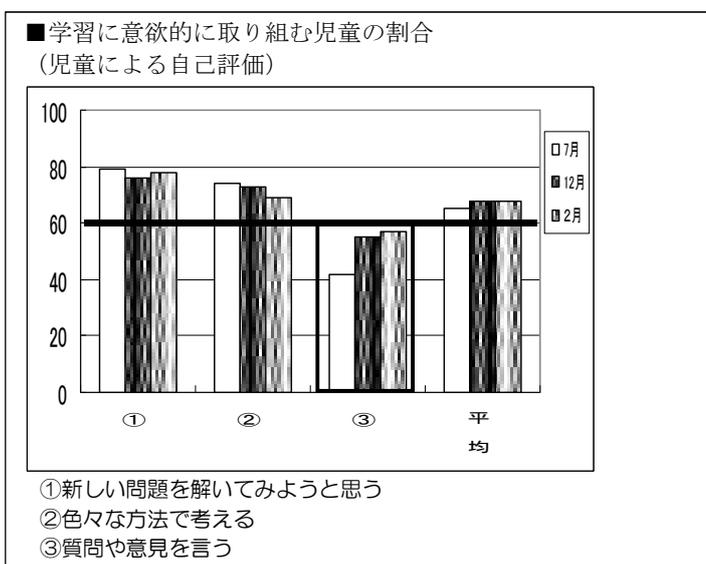


図8

問や意見を言う」児童は1学期に比べると15%増えており、全体としては60%以下と割合は低いものの、少しずつではあるが伝え合うという意識は高まっている。これらのことから、児童の学習意欲は着実に向上していると考えられる。

(3) つまずきの大きい児童生徒への効果のある指導の工夫

算数大会で、各学年とも2学期に学習した内容の問題を行った結果、80点未満の児童の割合は19%だった。学年の実態により差はあるものの、全体で20%以下にするという目標は達成することができた。

【久保中学校】

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ① 全国学力・学習状況調査において課題となった設問の比較国語においては、言語事項に課題があった。課題となった3つの設問を4月と2月で比較すると、漢字と歴史的仮名遣いについては、それぞれ正答率が30%以上向上した。また、数学においては、文字式の計算、図形、ヒストグラムの設問においては正答率がそれぞれ22.9%、37.7%、10.7%向上した。
- ② 「基礎・基本」定着状況調査において、平成25年度課題となった設問を6月と2月で比較すると、国語科の漢字の読みと書きの設問では、通過率がそれぞれ、0.7%、12.5%向上している。また、数学科では、回転移動、図形の性質、文字式の設問において通過率がそれぞれ6.5%、9.8%、10.1%向上した。さらに、英語科では、話の流れをつかみながら読んだり、語と語のつながりに注意して正しい英文を書いたりする設問では通過率がそれぞれ18.3%、6.5%向上している。
- ③ 教職員と生徒に対する質問紙調査の結果、9割以上の教師が「生徒に分かる言葉でめあてを提示している」という結果となった。教師が生徒の視点に立った言葉でめあてを提示することにより、見通しを持って授業を受けることができるようになった。そのことにより、授業の中で「理解できた」を実感できた生徒が75.4%（9月）から87.3%（12月）と向上したものと考える。

(2) 学習意欲の向上を図る取組

授業におけるグループ学習等における組み合わせや編成を、Q-U学級満足度調査の結果を基に行うことにより、自信のない生徒においても安心して、自分の意見を言えることができたように思われる。生徒アンケートの結果から、自己肯定感や自己存在感の向上が見られた（図9参照）。また、授業で積極的に発表したり、進んで取り組んだりする等、授業に対する関心・意欲・態度に関するアンケートの9月と12月実施の結果を比較すると、12月の方が肯定的回答をしている生徒の割合が増加した。このことから、学習意欲が向上してきているものと考えられる（図10参照）。

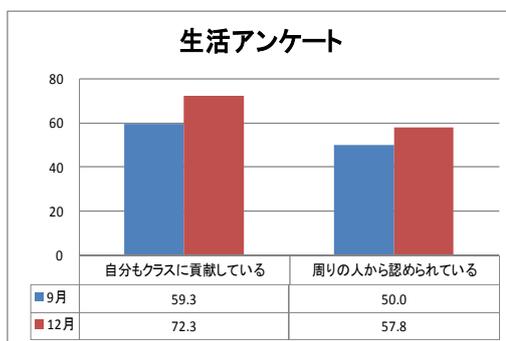


図9

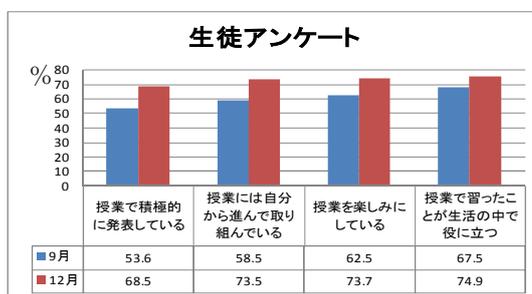


図10

(3) つまずきの大きい児童生徒の個の変容

- ① 「個人カルテ」に抽出した生徒に対して、スクールカウンセラーのアドバイス等を考慮した指導・支援を各教科担任が連携して行うことにより、授業でのノートに加え自主学習ノートにも変化が見られるようになった。英単語や漢字を書き写すだけだったノートが、文章表現や考えを記述するような、よりレベルの高い内容となってきた。

2. 調査研究全体の成果

- (1) 広島県「基礎・基本」定着状況調査や全国学力・学習状況調査における課題のある設問に

についての調査問題等による検証

久保小学校においては、第4学年は国語科、算数科ともに通過率が6.5%~15.5%増加したが、第5学年は通過率が減少した。思考力・表現力に係る意識調査では、全ての項目において60%以上を超えているものの、項目によっては減少しているものもあった。通過率60%未満の児童については、11%減少した。

久保中学校においては、国語科の漢字の読み書きについては通過率は全て増加したものの「主述の関係」や「伝えたい事柄を明確にして書くこと」については、通過率が減少した。数学科は、全ての設問において通過率が増加しており、取組に一定の成果が得られた。しかし「ヒストグラム」や「文字式」については、通過率が低く、継続して取組む必要がある。英語科は、話の流れをつかみながら読んだり、語と語のつながりに注意して正しい英文を書いたりする設問では通過率が向上しているものの、情報をもとにして自分の考えを書く設問については通過率が下がっており、継続課題となった。

- (2) 「個人カルテ」に抽出した児童・生徒のノートやワークシートの変容や、学習に対する意欲の変容についての検証

久保小学校においては、図の描き方や説明の仕方について継続的に指導を行った結果、記述内容に変容が見られた。

久保中学校においては、各教科担任が継続的に指導を行った結果、書き写すのみであったノートから考えを記述するノートへと変容が見られた。

- (3) 授業改善の推進状況については、教職員と児童・生徒に対して質問紙調査を実施し、肯定的回答の割合による検証

久保小学校においては、教師に対する質問紙結果で「めあてを達成するための指導の工夫」についての肯定的評価が100%となった。

久保中学校においては、生徒に対する質問紙結果は全ての項目において肯定的評価の割合が増加した。また、教師に対する質問紙結果では、「つけたい力の明確化」「生徒に分かる言葉でのめあての提示」とともに肯定的評価が9割を超えた。

- (4) 学習習慣の定着や学習意欲の向上に関する課題について、広島県「基礎・基本」定着状況調査の児童・生徒質問紙調査や、Q-U学校満足度調査の質問紙を活用した検証

久保小学校においては伝え合い活動の充実を図った結果、「質問や意見を言う」という項目について15%の増加が見られた。

久保中学校においては、「自分もクラスに貢献している」「周りの人から認められている」という項目で肯定的評価の割合が向上した。

3. 取組の成果の普及

- (1) 確かな学力の育成に係る実践的調査研究連絡協議会（小・中学校）において実践発表
- (2) 学力向上のための実践交流会（県教育委員会主催）において成果発表の予定

○ 今後の課題

- (1) つまづきを克服し、全員がねらいを達成できるための授業スタイルを中学校区として確立していく。
- (2) 生徒指導の三機能を活かした授業の充実を図るための効果的な発問、声かけ、支援等、1時間の授業レベルで具体化を図っていく。
- (3) 小中学校それぞれの特質を活かしたより有効な「個人カルテ」を作成し、活用していく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	広島県	番号	7
-------	-----	----	---

推進地区名	尾道市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1 重点課題

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ・ つまずきを克服し、全員がねらいを達成できる授業スタイルの確立
- ・ 考える過程を工夫した授業づくり
- ・ 児童・生徒の理解度に応じた支援の工夫

② 学習意欲の向上を図る取組

- ・ 児童・生徒が意欲をもって主体的に学ぶための個に応じた支援の充実
- ・ 評価（見取り）を大切に学習指導の工夫

③ つまずきの大きい児童・生徒への効果のある指導の工夫

- ・ 学力の定着状況に応じた個別指導の充実
- ・ 基礎学力を定着させるための家庭学習の充実
- ・ きめ細やかな学習状況の把握に基づく少人数指導の充実
- ・ 指導方法の工夫による個別指導の充実

2 重点課題への取組状況

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ・ 推進地区協議会における推進計画に基づき、研究授業及び研究協議会を実施した。その際の研究授業は、平成25年度全国学力・学習状況調査や広島県「基礎・基本」定着状況調査の分析から課題とされた内容等を踏まえた内容とした。
- ・ 久保小学校では算数科を中心に、また久保中学校では全教科で学校横断的に実践的な研究に取り組むよう指導した。学力向上の成果及び課題については、評価問題及び調査問題の実施、及び個人カルテに抽出した児童・生徒の変容等により検証するよう助言した。
- ・ 研究にあたっては、「ひろしま」学びのサイクルに基づき、知識・技能を活用する学習活動の充実を図り、学習指導要領に示されている学力の三つの要素である確かな学力（基礎的・基本的な知識技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲）の育成を図ることとした。
- ・ 久保小学校においては「久保小学びのサイクル」、久保中学校においては「久保中授業スタイル」を確立した。小中一貫した授業モデルの開発には至らなかったものの、授業の冒頭で「つけたい力を明確にする」ことと、授業の終末に「評価問題」を実施し、学習内容の定着の見取りを確実にを行うことを、両校ともに共通して実施していくよう指導した。

②学習意欲の向上を図る取組

- ・ 発達段階を考慮した学習規律を確立し、授業における指導の一貫性を図るよう指導した。
久保小学校から久保中学校へ指導の円滑な接続を図るために、両校の生徒指導主事が定期的に取り組の交流を行い、指導内容の共有化を図るよう助言した。
- ・ 家庭学習の内容と授業内容との関連を図るとともに、保護者と連携した家庭学習の指導等を行うよう指導した。久保小学校、久保中学校ともに「家庭学習の手引き」を作成し、保護者に配付した。学習の定着に課題のある生徒に対しては、家庭学習の内容に対する個別指導を行った。
- ・ Q-U学校満足度調査の結果により把握した児童・生徒の状況に応じて、授業におけるグループ編成や座席配置等を工夫した。また、「個人カルテ」に抽出した児童・生徒に対しては、支援や手立てを明確にして指導案に明記し、児童・生徒が意欲をもって学習できるようにした。
- ・ 教科指導と生徒指導の一体的な取組による授業改善を図るために、生徒指導の三機能を意識した授業づくりを行った。

③つまずきの大きい児童・生徒への効果のある指導の工夫

- ・ 学習のつまずきが大きい児童・生徒に対しては、暗記や反復だけでなく、学習への意欲付けを図るために教材、教具や場面設定を工夫するよう指導した。
- ・ 児童・生徒が1時間の見通しをもって学習を進めていくことができるよう、学習過程の可視化を行う等、視覚的な支援を充実させた。
- ・ ドリルタイムや学校独自の英語検定の実施等により、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る取組を両校ともに工夫した。
- ・ 学習のつまずきが大きい児童・生徒や生徒指導上の課題が見られる児童・生徒への手立ての具体化を図るために、スクールカウンセラー等との教育相談活動の充実を図り、専門的な立場からのアドバイスを指導に活かした。

3 調査研究の成果の把握・検証

- 平成25年度全国学力・学習状況調査及び広島県「基礎・基本」定着状況調査等の結果を踏まえ、課題のある設問で求められる力が付いたか検証した。その際、広島県「基礎・基本」定着状況調査や全国学力・学習状況調査等を活用した調査問題等を作成・実施し、取組の成果等の把握と検証を行った。

【検証項目】

※久保小学校：国語科（「基礎・基本」定着状況調査通過率、NRT調査正答率）

算数科（「基礎・基本」定着状況調査通過率、NRT調査正答率）

算数科（思考力・表現力に関連する質問紙項目）

（①言葉、数、式、図、操作等と関連づけながら筋道を立てて説明すること、②既習事項をもとに思考すること、③解き方の理由を説明すること）

算数科（単元末テストにおける「数学的な考え方」の60%未満の割合）

※久保中学校：国語科（①言語事項、②伝えたい事柄を明確にして書くこと）

（設問別）

数学科（①文字式の計算、②図形の回転移動 ③ヒストグラム）

英語科（①話の流れをつかむ、②語と語のつながり③情報をもとに自分の考えを書くこと）

久保小学校においては、第4学年は国語科、算数科ともに通過率が6.5%~15.5%増加したが、第5学年は通過率が減少した。思考力・表現力に係る意識調査では、全ての項目において60%以上を超えているものの、項目によっては減少しているものもあった。

通過率60%未満の児童については、11%減少した。

久保中学校においては、国語科の漢字の読み書きについては通過率は全て増加したものの「主述の関係」や「伝えたい事柄を明確にして書くこと」については、通過率が減少した。

数学科は、全ての設問において通過率が増加しており、取組に一定の成果が得られた。しかし「ヒストグラム」や「文字式」については、通過率が低く、継続して取組む必要がある。

英語科は、話の流れをつかみながら読んだり、語と語のつながりに注意して正しい英文を書いたりする設問では通過率が向上しているものの、情報をもとにして自分の考えを書く設問については通過率が下がっており、継続課題となった。

- 「個人カルテ」に抽出した児童・生徒のノートやワークシートの変容や、学習に対する意欲の変容について検証した。

久保小学校においては、図の描き方や説明の仕方について継続的に指導を行った結果、記述内容に変容が見られた。

久保中学校においては、各教科担任が継続的に指導を行った結果、書き写すのみであったノートから考えを記述するノートへと変容が見られた。

- 授業改善の推進状況については、教職員と児童・生徒に対して質問紙調査を実施し、肯定的回答の割合により検証を行った。

久保小学校においては、教師に対する質問紙結果で「めあてを達成するための指導の工夫」についての肯定的評価が100%となった。

久保中学校においては、生徒に対する質問紙結果は全ての項目において肯定的評価の割合が増加した。また、教師に対する質問紙結果では、「つけたい力の明確化」「生徒に分かる言葉でのめあての提示」とともに肯定的評価が9割を超えた。

- 学習習慣の定着や学習意欲の向上に関する課題について、広島県「基礎・基本」定着状況調査の児童・生徒質問紙調査や、Q-U学校満足度調査の質問肢を活用し、成果等の把握と検証を行った。

久保小学校においては伝え合い活動の充実を図った結果、「質問や意見を言う」という項目について15%の増加が見られた。

久保中学校においては、「自分もクラスに貢献している」「周りの人から認められている」という項目で肯定的評価の割合が向上した。

4 今後の課題

- (1) つまづきを克服し、全員がねらいを達成できるための授業スタイルを中学校区として確立していく。
- (2) 生徒指導の三機能を活かした授業の充実を図るための効果的な発問、声かけ、支援等、1時間の授業レベルで具体化を図っていく。
- (3) 小中学校それぞれの特質を活かしたより有効な「個人カルテ」を作成し、活用していく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	広島県	番号	7
-------	-----	----	---

推進校名	広島県尾道市立久保小学校
------	--------------

○推進校として実施した研究内容

1 重点課題

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ・つまづきを克服し、全員がねらいを達成できる授業スタイルの確立
- ・考える過程を工夫した授業づくり

② 学習意欲の向上を図る取組

- ・児童が意欲をもって主体的に学ぶための個に応じた支援の充実
- ・評価（見取り）を大切に学習指導の工夫

③ つまづきの大きい児童生徒への効果のある指導の工夫

- ・学力の定着状況に応じた個別指導の充実
- ・基礎学力を定着させるための家庭学習の充実

2 重点課題への取組状況

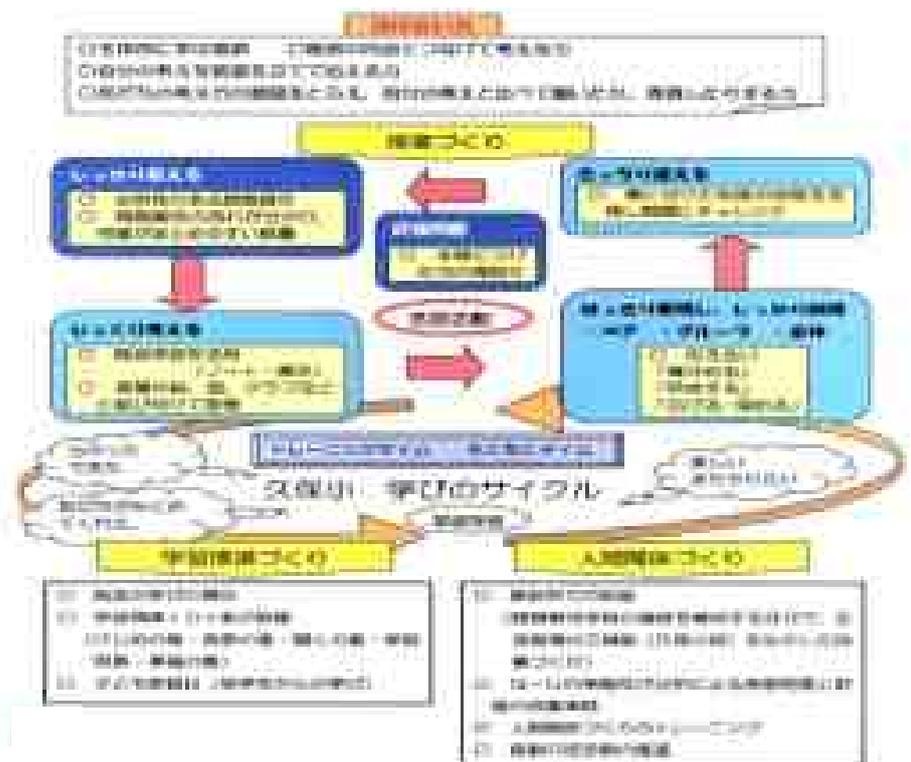
① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

(1) つまづきを克服し、全員がねらいを達成できる授業スタイルの確立

○久保小学びのサイクルによる授業づくり

【図1 久保小学びのサイクル】

しっかり教えたことを使って、じっくり考える時間を保障する。その際に、考える手立てを教室掲示や板書、ノートに示し、それらを活用して考えさせる。考えたことは、全体やペア・グループなどで伝え合うことで、考えを「確かめ」「吟味」し、「広げ・深める」ことができる。また、学習したことを評価し、指導を繰り返すことで、学力の定着を図り、学習意欲の向上につなげることができると考えた。

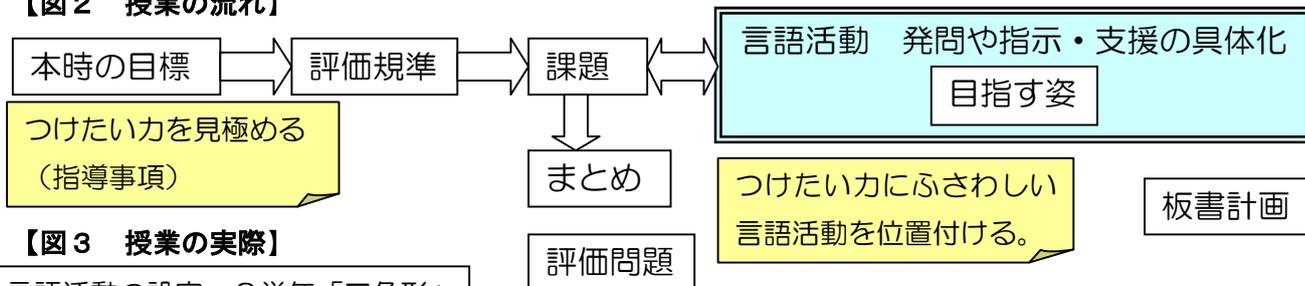


(2) 考える過程を工夫した授業づくりの工夫

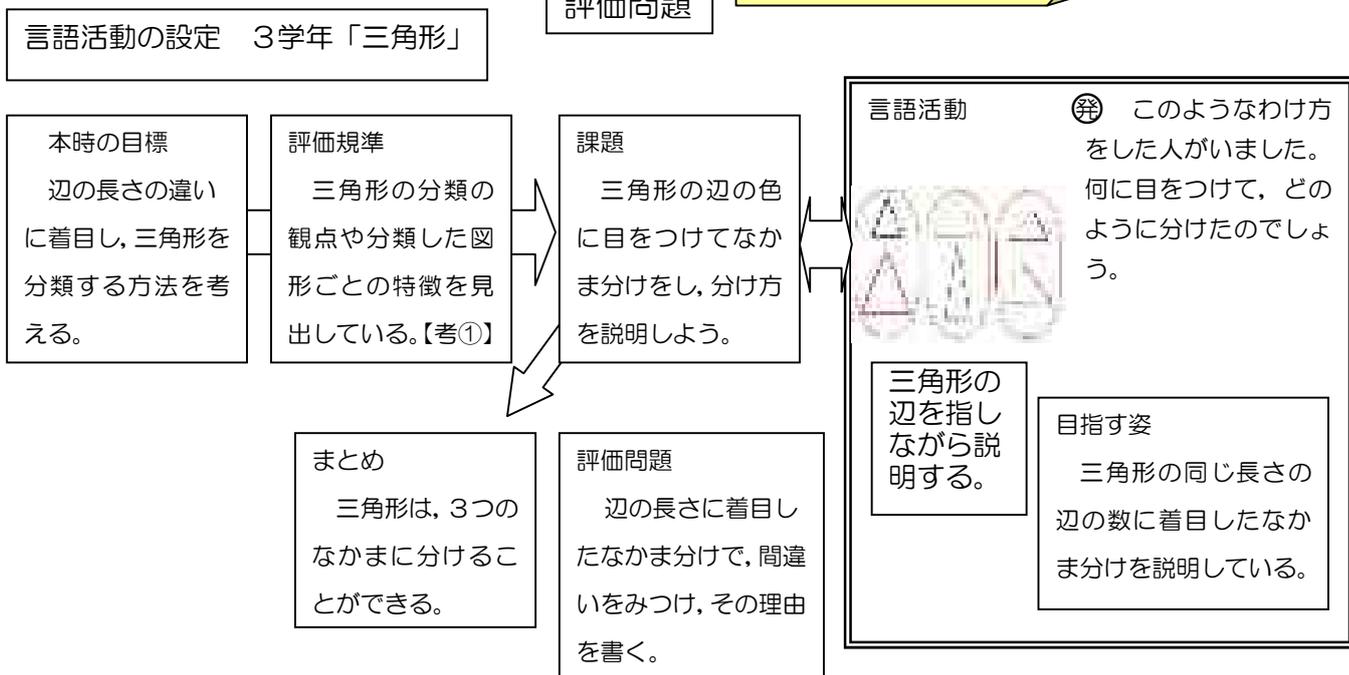
○言語活動を位置付けた授業づくり

図2に示したとおり、学習過程において、つきたい力を明確にし、その力をつけるための言語活動を位置付けるとともに、言語活動を行うための発問や指示をより具体的に行うようにした。また、目指す児童の姿を明確にし、目指す姿に近づけるような指導や支援を行った。

【図2 授業の流れ】



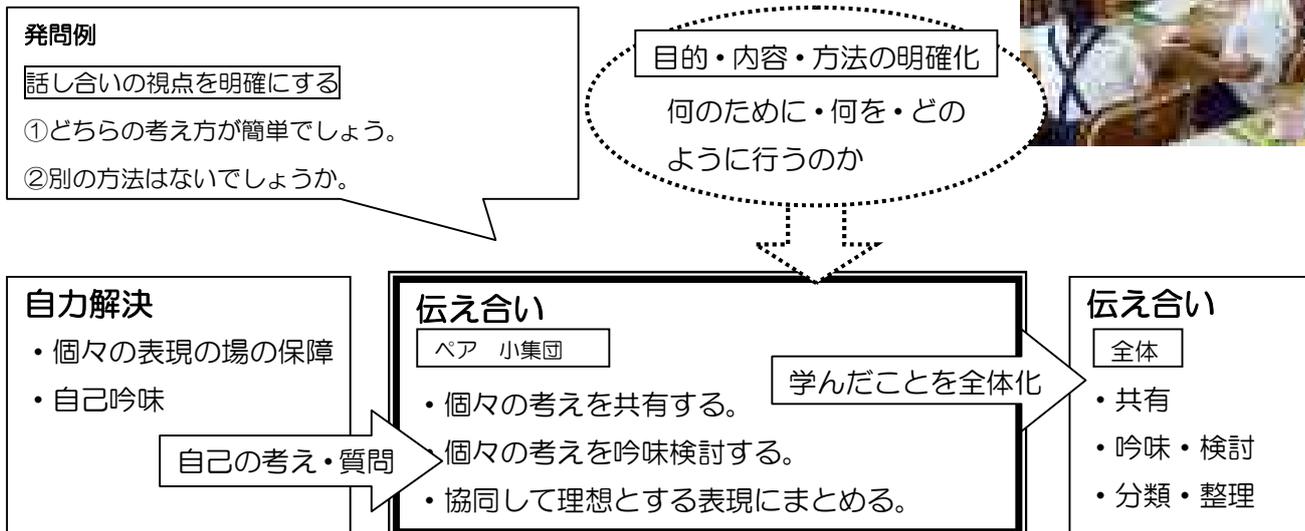
【図3 授業の実際】



○伝え合い活動（ペア、グループ、全体）の充実

伝え合い活動のねらいを明確にして、話し合わせた。また、相手に自分の考えを伝えたいようになるよう、発問を工夫した。効果的な伝え合いのアイテムについても工夫した。（ノート・ワークシート・ホワイトボード等）

【図4 伝え合い活動のポイント】



○ノート指導の徹底

ノート指導は、①学習の質の向上、②学習態度の育成、③学習指導の改善という意義があると考え、丁寧に指導していった。

具体的には、図5に示したように、必ず書く内容を統一し、図やグラフ・表・数字・式などを用いて自分の考えを書かせるようにした。また、考え方の説明についても、筋道・根拠を書くように指導した。また、友だちの考えのよさについても振り返りなどで書けるよう指導した。



【図5 ノートの書き方】



② 学習意欲の向上を図る取組

(1) 児童が意欲をもって主体的に学ぶための個に応じた支援の充実

○生徒指導の三機能（久保小版）を生かした授業づくり

授業の中で、児童に「自己存在感」を高め、「共感的人間関係」を育て、「自己選択・決定の場」をもたせるための支援や言葉がけ、教師の姿勢や指導の工夫を行った。また、授業研究の中で出た意見や方策をもとに、具体的な言葉がけなどを「教師の姿勢と指導10」としてまとめ、活用した。

例えば、「児童の名前を呼ぶときはにっこりしよう。」「児童の自力解決などは、「できているよ。」「丁寧に書いたね。」など肯定的な言葉がけをしたりしながら、赤ペンで丸つけたりするなどに取り組んだ。

○個人カルテの活用

児童の学習や生活の状況等についての的確に把握し、教科指導と生徒指導の一体化を目指した授業づくりを推進するとともに、児童一人一人の課題に応じた指導・支援を行うために、個人カルテを作成し活用することを試行した。

図6に示したとおり、個人カルテには、学習に関しては学力調査結果と学期ごとのまとめのテスト（漢字・算数単元テスト）結果の推移、学習上の課題の記述を、また、生活に関してはQ-U学級満足度調査結果の推移、生活面の課題の記述等を記載することとした。

【図6 個人カルテ】



○子ども参観日の実施

低学年・中学年が高学年の授業の伝え合いの場を参観し、学習に対する姿勢や伝え合いの様子を学んだ。参観後、感想を書き、高学年に渡した。また、高学年は、他の学年に参観され、感想の手紙をもらうことで、学習意欲の向上につながった。



(2) 評価（見取り）を大切に
した学習指導の工夫

児童が本時につけるべき力を確実に身につけることができるよう、つけたい力を明確にして、それを見取る評価問題を作成し実施した。

評価問題は、45分間の中で行い、つまずいている児童には、なるべくその時間に指導・支援を行うようにした。

そのために、問題の内容は、ポイントをしぼって、教師が見取りをしやすい内容になるよう工夫した。

【図7 評価問題の作成・活用】

評価問題の改善

時間配分

授業のどの場面で、評価問題を行うのか明確にする。45分間の授業で、評価と指導まで行い、児童に達成感をもたせる。

問題の内容の精選

本時に学習した内容で評価する。（つけたい力）
板書に学習のあしあとを残し、考える手立てとする。

評価問題と適用問題の区別

- ・評価問題（本時の評価規準で評価する問題）
- ・適用問題（練習・習熟問題）

評価と指導

児童が評価問題を行っているときに教師は一人一人を見取り、つまずいている児童の個別指導を行う。



③ つまずきの大きい児童生徒への

効果のある指導の工夫

(1) 学力の定着状況に応じた個別指導の充実

○トレーニングタイム・もくもくタイムの充実

トレーニングタイム		もくもくタイム
8:25~8:35 月・木・金（算数科） 式と計算・図形 量と測定・数量関係 水（国語科） 漢字・ことば・視写 音読	算数大会 ※学期の終わり ※10分間でできる問題で、80点以上を目標に取り組んだ。 ※実態に応じて、同じ問題を何度か練習をして行った。 （80点以上を点数することで、自信や意欲を持たせた。） 2学期 結果 80点以上 82% ※賞状 80点以上 合格賞 80点未満 努力賞	木曜日 放課後の30分間 ※個別指導 

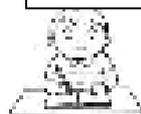
○視覚支援の充実

学習の見通しをもたせたり、学習したことを整理したりするために視覚支援の工夫を行った。見通しをもたせるカードを示すことで、今何をするのか、次に何をするのが分かり、学習にスムーズに取り

活かす



じっくり考え



視覚支援の充実



学習の見通しを持たせる

(2) 基礎学力を定着させるための家庭学習の充実

○家庭学習の手引きの活用

家庭学習の内容や仕方を手引きとして示して、取り組ませた。しかし、効果的な活用が十分できず、年間を通した取組になっていない。今後の課題である。

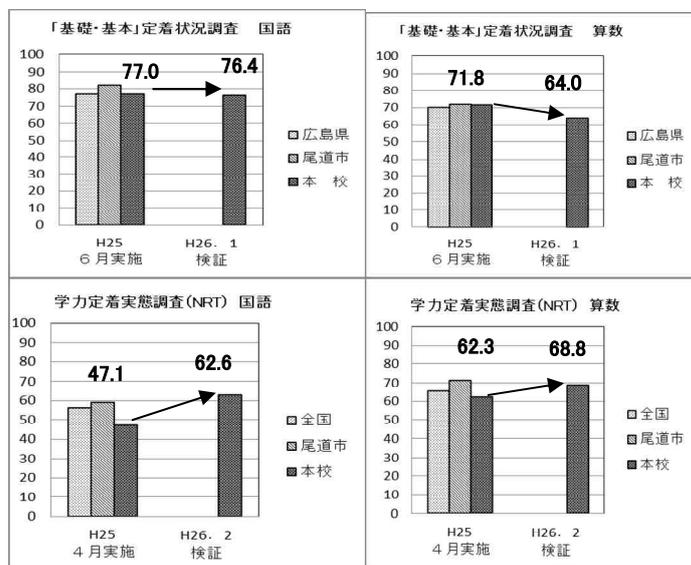
3 調査研究の成果の把握・検証

(1) 学力の定着・向上

①基礎的・基本的な知識・技能の習得

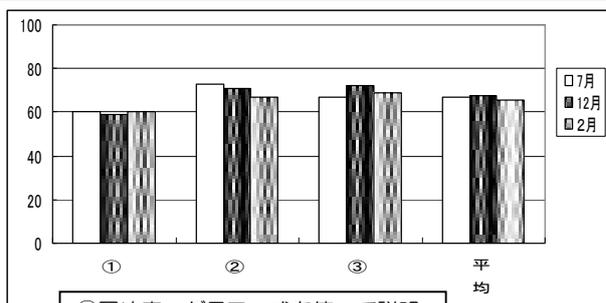
第5学年で実施している広島県「基礎・基本」定着状況調査結果を6月と1月で比較すると、平均通過率が国語ではほぼ同じであり、算数では約8ポイント下がっている。また、第4学年で実施している学力定着実態調査結果を4月と1月で比較すると、国語、算数とも通過率が上がっている。

この結果から、基礎的・基本的な知識・技能の習得はおおむねできていると考えられるが、確かな学力の育成には十分至っていない実態が見られる。



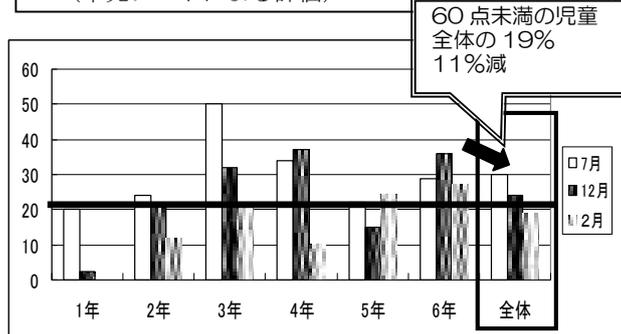
②思考力・表現力の育成5

■言葉・数・式・図・操作等と関連付けながら、筋道立てて表現している児童の割合 (児童による自己評価)



- ①図や表、グラフ、式を使って説明
- ②既習事項をもとに思考
- ③解き方のわけを思考

■数学的な考え方において、60点未満の児童の割合 (単元テストによる評価)



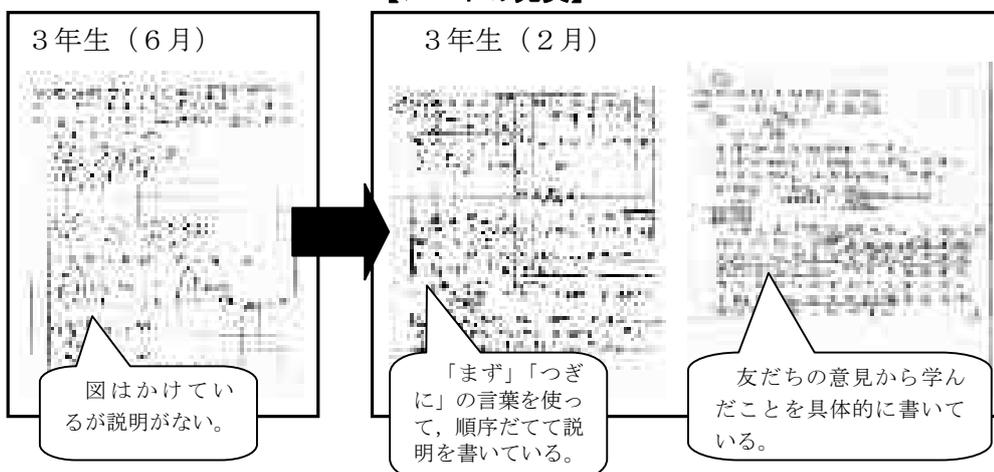
60点未満の児童
全体の19%
11%減

説明する手立ての3項目については、どの項目も肯定的な評価をした児童の割合は6割を超え、数学的な考え方の単元テストでは、60点未満の児童の割合が30%から19%へと11%減少した。

また、年間を通して、図の描き方や説明の仕方について指導し、ノートの充実が図られた。よいノートについては紹介したり、○を付けて評価したりすることで、少しずつ充実した内容のノートになってきている。

これらのことから、授業の中に言語活動を仕組むことや個別の支援を行うことは、思考力の向上に有効であったと考えられる。

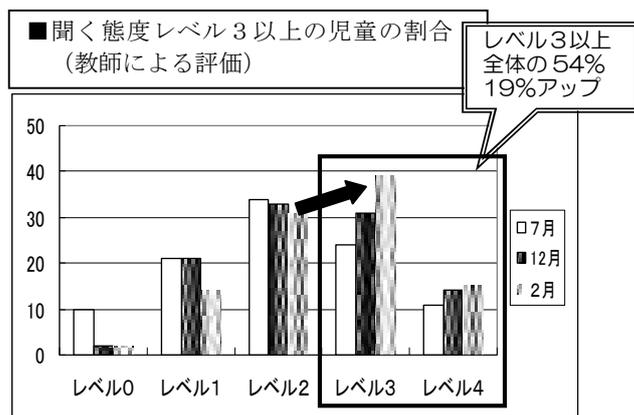
【ノートの充実】



(2) 学習意欲の向上

①学習規律の定着

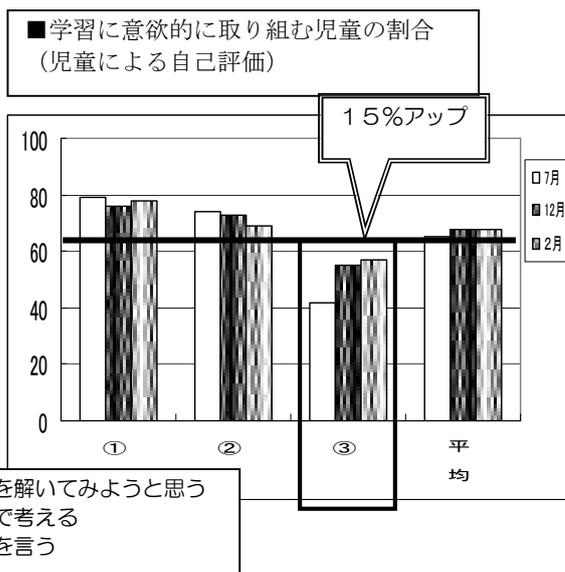
生徒指導の三機能に基づいた教師の言葉かけや態度は、「聞く」態度の向上（19%アップ）に有効であった。また、4月の頃の自分と比べて、「聞く」力は伸びたか（児童の自己評価）という問いに対して、83%の児童が当てはまると回答しており、学習規律の定着が図られたと考えられる。



②学習意欲の向上

学習意欲に関しては、「新しい問題を解いてみようと思う」と回答した児童の割合が80%近くになっている。また、「質問や意見を言う」児童は1学期に比べると15%増えており、全体としては60%以下と割合は低いものの、少しずつではあるが伝え合うという意識は高まっている。

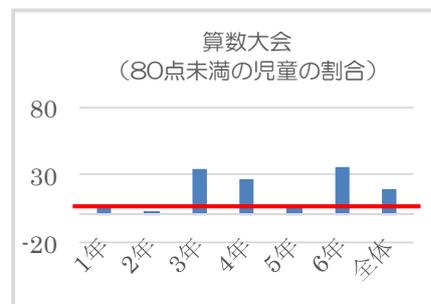
これらのことから、児童の学習意欲は着実に向上していると考えられる。



- ①新しい問題を解いてみようと思う
- ②色々な方法で考える
- ③質問や意見を言う

(3) つまずきの大きい児童生徒への効果のある指導の工夫

算数大会で、各学年とも2学期に学習した内容の問題を行った結果、80点未満の児童の割合は19%だった。学年の実態により差はあるものの、全体で20%以下にするという目標は達成することができた。



4 今後の課題

- (1) 既習事項の定着が不十分であるため、既習事項を生かして新しい問題を考えたり、図や表、グラフ、式を使って説明したりする児童の割合が低く、目標とした80%以上に達することはできなかった。
引き続きつきたい力を明確にして、ねらいに迫るための言語活動を工夫する。思考場面では考えるための手立て（術）を提示し、既習事項と関連付けたり多様な考え方を分類したりしながらより分かりやすい説明の仕方をする必要がある。
- (2) 学習意欲については、7月に比べると向上はしたものの、目標とした80%より大きく下回っている。学習規律の一層の確立を図るとともに、生徒指導の三機能を生かした授業の充実を図り、児童が「分かった」、「できた」という自信や意欲をもつことのできる授業づくりを進める必要がある。
- (3) 個人カルテを効果的に活用し、課題の大きい児童の状況を的確に把握し、個々の学習状況に応じた授業中の支援、帯タイムや家庭学習における問題の提示など個に応じたきめ細かな指導の充実を図る必要がある。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	広島県	番号	7
-------	-----	----	---

推進校名	広島県尾道市立久保中学校
------	--------------

○推進校として実施した研究内容

1 重点課題

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ・ つまずきを克服し、全員がねらいを達成できるための授業スタイルの確立
- ・ 生徒の理解度に応じた支援の工夫

② 学習意欲の向上を図る取組

- ・ 生徒が意欲をもって主体的に学べるための授業の工夫
- ・ 評価(見取り)を大切に学習指導の工夫

③ つまずきの大きい児童生徒への効果ある指導の工夫

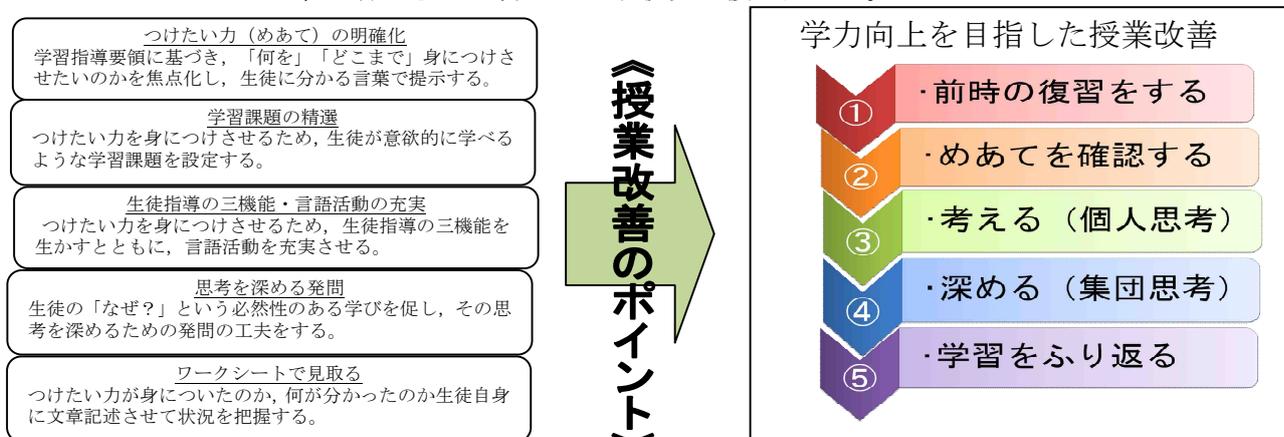
- ・ きめ細やかな学習状況の把握に基づく少人数指導の充実
- ・ 指導方法の工夫による個別指導の充実

2 重点課題への取組状況

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

(1) 全員がねらいを達成できるための授業スタイルの確立(授業モデルの進化)

各授業における「つきたい力」を明確にし、生徒一人一人が見通しを持って主体的・自律的に学ぶことができるよう、小中の共通授業スタイルとして授業の構成・学習過程等の確立を図った。生徒に分かりやすい言葉で「めあて」を提示し、終末に授業の振り返りをさせるとともに、授業の流れが分かるよう視覚支援を図った。



【図1 久保中授業スタイル】

(2) 知識や技能を活用する学習活動の充実

ペアトークやグループ活動等、生徒が知識や技能を活用する学習活動の場を意図的・計画的に取り入れ、言語活動の充実に向けた生徒主体の授業づくりを行った。

また、基本的な学習内容を生徒自らが認識するとともに、学習意欲を喚起するための「久保中検定」を設けた。今年度は英語科で、1級から40級までのレベルを設け実施した。英語の授業の中で毎時間検定試験を行ってきた。また、学習活動の基盤となる言語に関する能力を高めるとともに、授業に対する集中力を強めるために、1時限目の前に視写活動を行った。

(3) 個々の理解度に応じた家庭学習の工夫

家庭における学習習慣の確立に向け、自主学習ノートの徹底と充実に取り組んできた。生徒個々の理解度に応じた主体的な学習となるよう「家庭学習のポイント」を示し、学習ノートの作成や活用の在り方について個別の指導を行った。また、つまずきの大きい生徒に対しては、定期テスト前の期間に教科担当者と学級担任が連携し、個別の指導を行った。

平成25年度 尾道市立久保中学校
確かな学力を定着・向上させるための **家庭学習のポイント**

① 毎日こつこつやり切ります。

学年	目標学習時間	場所	内容
1年	1～2時限	家の中で落ち着いた場所 いつでも見つけられる	復習中心 自主勉強の習慣化
2年	1.5～2.5時限		定期テスト勉強の計画・実践
3年	2～3時限		進級準備に重点を置き、 3年時の総復習

② 学習前の身の回りの整理整頓をして、集中しましょう。
(机の上を片付けたりゴミを捨てるなど、いわゆる「ながら勉強」はほめていません)

③ 苦手な教科の復習を重点的にしましょう。
(わからないことはそのままにせず、教科書を見たり、教科の先生に質問したりして解決します)

【共通の家庭学習】

- 実学録の学習 新出漢字を漢字ノートに書き練習します！
- 英語1ページノート アルファベットや単語、例文を練習します。
- 自主学習ノート
教科書を読み、授業ノートやプリント、ワークを整理して、授業を振り返ります。
必ず、**ナンバー**、**日付**、**時間**(始末や終わり)、**目標**(ゆめ)、**振り返り**を書きます。
キーワードは、3つ！

④ 『教える』ひたすら書いて書いて書いて！
⑤ 『理解する』問題を解いたら、教える側の方(補助)を確認！
⑥ 『何となく』理解したと、わかるノートを提出す！

【内容】

国語	漢字を覚えたり、音読の原簿を調べたり、教科書を複写したりして覚える。 ○ワークの練習問題を解き、できなかったところやわからないところは答えを確認し、ノートに書き添える。
社会	○ワークを解き、間違えた問題をチェックし、答えを教科書などで確認する。 ○間違えた問題やワークに書き込み、音読して覚える。
数学	○教科書などの用語や練習問題を復習し、できないところを確認する。 ○間違えた問題を繰り返し練習し、できるまで確認する。
理科	○学習した理科用語を口頭で漢字で覚える。 ○学習したことを図やイラストを入れながら、わかりやすくノートにまとめる。
英語	○教科書を音読したり、単語や例文などを繰り返しノートに書いて覚える。 ○ワークの練習問題を解き、できないところはワークから復習する。

【図2 家庭学習のポイント】

平成25年度第1学期期末試験対策 **補充学習 実施要項** (訂正版)
平成25年6月19日
尾道市立久保中学校

1 ねらい
○ 志望学力の向上
○ 目標の生徒へ適切な補欠丁寧な指導を行うことにより、学習意欲をもたせる。
○ 個別指導の機会を通して、基礎的・基本的な学習内容の定着を図る。

2 対象者
○ 各教科担当者が指名する生徒

3 期 間
平成25年6月25日(火)～平成25年7月1日(月)

4 日程と時間
6月25日(月)～28日(金) 7月1日(月)
 6校時終了 15:05～16:25 6校時終了 14:15
 7校時 15:10～16:25 7校時 14:20～14:35
 H/R 15:30～16:45 H/R 14:40～14:55
 補習学部 15:55～16:45 補習学部 15:05～16:55
 完全下校 17:00 完全下校 16:10

	6/25(月)	26(火)	27(水)	28(金)	7/1(月)
1年	教 科 社会 国語 理科	英 語 数学 理科	英 語 数学 理科	国 語 天野・藤林 山口	理 科 山口 天野
2年	教 科 国語・砂田 国語・山口 理科	社 会 数学 理科	国 語 数学 理科	理 科 山口 天野	英 語 山口 天野
3年	教 科 国語・山口 理科	英 語 数学 理科	英 語 数学 理科	国 語 天野・藤林 山口	理 科 山口 天野

5 内 容
テスト範囲の学習内容の復習
指導内容については教科担任に一任します。
・生徒に「理解できた」を体感させ、講師の「有用感」を実感させます。

6 その他
・教科担任だけでなく、学年を問わず教職員が一体となって指導にあたります。

【図3 補充学習実施要項】

② 学習意欲の向上を図る取組

(1) Q-U学級満足度調査の実施による指導方法の工夫

授業づくりや生徒への適切な指導・支援のための事前資料として、Q-U学級満足度調査のデータを活用した「個人カルテ」を用いた。

「個人カルテ」の内容構成は、学力調査や定期試験等の成績データ、小学校時から現時点までの学習、生活状況や家庭での様子、そして、Q-U学級満足度調査において生徒指導の三機能に

関連性の高い質問項目を整理したものとした。「個人カルテ」は、シートとしてデジタルデータ化することにより、全教職員が情報を共有するとともに、適宜内容を更新した。



【図4 個人カルテ】

(2) 「個人カルテ」を活用した個への支援の充実

「個人カルテ」の活用として、Q-U学級満足度調査において生徒指導の三機能に関連性の高い質問項目を整理したものを学習指導案に記述し活用した。授業における全体的な学習過程とともに、つまずきの大きい生徒に対する個別の指導・支援に生かした。

調査結果からみる課題				
「NRT」調査 第3部 関数 16 1)2)3)4) 〔誤答分析〕 具体的事象において2数の数量関係を正しく表した式を選択する問題において課題があった。 生徒のつまずきの原因として、 ・変化する2量がどのように変化していくのかが把握できていない。 ・具体的事象がどのようなものかが捉えられていない。 ということが考えられる。				
		久保中	全国平均	
数と式	56.6 (54.3)	58.2		
図形	49.7 (48.2)	51.9		
関数	49.6 (51.3)	53.3		
資料の整理	41.6 (38.1)	44.0		
2数の関係の見方や調べ方	54.1 (59.6)	61.3		
※数字はNRT教科全体通過率				
学方とQ-Uとの相関分析				
学級生活満足群 (7人)	非承認群 (4人)	侵害行為認知群 (0人)	学級生活不満足群 (0人)	要支援群 (2人)
生徒A(43) 生徒C(33)	生徒I(16)			生徒M(19)
個人カルテによる分析				
学力に課題のある4名を抽出し、個人カルテの分析を行った。その結果、生徒B、Mは自己存在感、生徒Iは自己存在感と自己決定の値がほかの値に比べて低い。そのため、グループ学習を通して少人数で意見を言える場を設定し、言いやすい雰囲気作りをしていく必要がある。また、生徒Aは集中力に欠けることが多い。				
指導改善のポイント				
◇具体的に示す例としては日常生活に関連する事柄を多くあげ、身の回りに関数関係の事象が多くあるということを実感させる。 ◇具体的な例の中での変化の様子をひとつひとつ確認させることで、伴って変わる数量をきちんと把握させる。 ◇変数や変域、座標などの関数概念をきちんと理解させ、表や式、グラフなどの数学的表現を確実に身につかせた上で、伴って変わる二つの数量についての変化の様子をとらえさせる。 ◇表・式・グラフを単独で用いるのではなく相互に関連付けながら学習することを通してそれぞれのよさを実感を持って理解させ、関数の特徴を能率的に調べることができるようさせたい。 ◇比例・反比例の利用に際しては、身近な事象から関数関係を見いださせ、グループ活動などを通して主体的に問題に取り組ませたい。				
【図5 学習指導案】				

(3) 発達段階を考慮した学習規律の指導の徹底

小中一貫した授業スタイルとして共通した学習規律の確立を図るとともに、生徒一人一人が見通しをもって主体的・自律的に学ぶことができるよう、生徒の発達段階を考慮した指導を徹底した。Q-U学級満足度調査のデータやスクールカウンセラーによるアドバイスに基づき、学級担任と教科担任が連携し、配慮を要する生徒に対してよりきめ細かな学習規律の指導を行った。

(4) スクールカウンセラーを活用した教育相談活動の充実

スクールカウンセラーのカウンセリングを通して授業に対するストレス耐性やコーピングスキルの向上を図った。

③ つまずきの大きい児童生徒への効果ある指導の工夫

(1) スクールカウンセラー等との連携及びQ-U学級満足度調査による情意面での課題の分析と指導の工夫

授業中の生徒に対するかかわり方について、スクールカウンセラーのアドバイスを得た。また、Q-U学級満足度調査の結果から、つまずきの大きい生徒に対する課題を明らかにして具体的な手立てを講じた。

(2) 「個人カルテ」の活用による少人数指導の工夫

少人数指導において「個人カルテ」の記載内容を基に、生徒の人間関係を考慮したグル

ープやペアを編成し、発問の工夫、机間指導での声かけなどの形成的評価に生かした。



【図6 生徒の人間関係を考慮したグループ編成による少人数指導】

(3) ワークシート、家庭学習プリント等による個別指導の工夫

授業で活用するワークシートは、生徒の主体的・自律的な学びを促すよう、また、つまづきの大きい生徒が学習内容を確実に定着できるよう、個々の理解度を考慮して作成した。また、家庭学習プリントについては、学級担任と教科担任が連携を図り、適宜個別指導に当たった。

(4) 関心・意欲を高める教材、教具等の工夫

生徒が見通しをもって主体的に学習活動に取り組めるように、学習過程を視覚化したり、グループ活動時にホワイトボードや付箋を活用したりするなど、生徒の理解度を高める教材、教具等の開発・活用を図った。



【図7 付箋を活用したグループ活動】



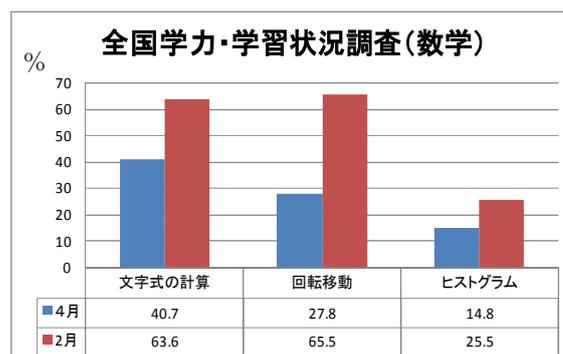
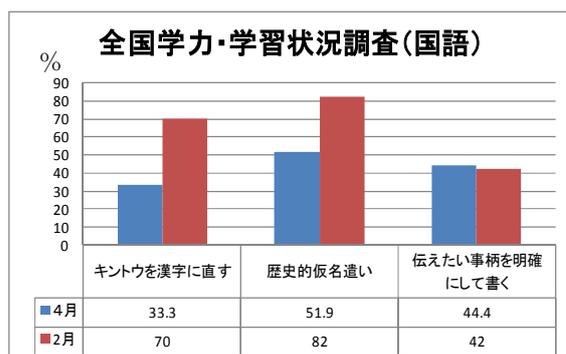
【図8 ホワイトボードを活用したグループの考えの交流】

3 調査研究の成果の把握・検証

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

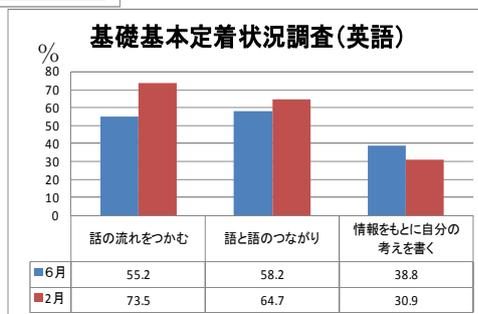
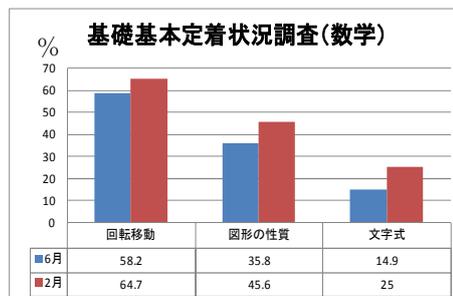
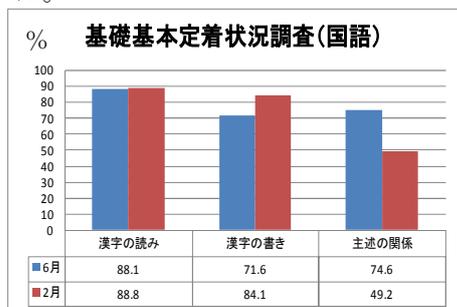
○全国学力・学習状況調査において課題となった設問の比較

国語においては、言語事項に課題があった。課題となった3つの設問を4月と2月で比較すると、漢字と歴史的仮名遣いについては、正答率30%以上の増加が見られたが、「伝えたい事柄を明確にして書くこと」については継続課題となった。また、数学においては、文字式の計算や図形の設問においては正答率が20~40%増加した。しかし、ヒストグラムの設問では、正答率は増加しているものの、全体の1/4程度に留まり、まだ課題がある。



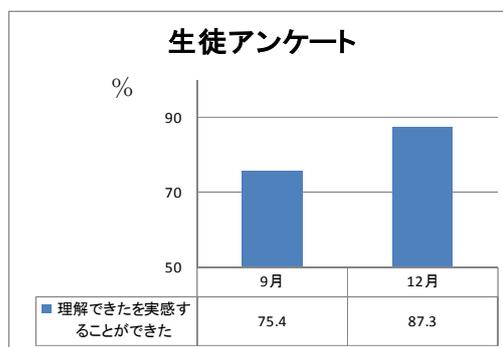
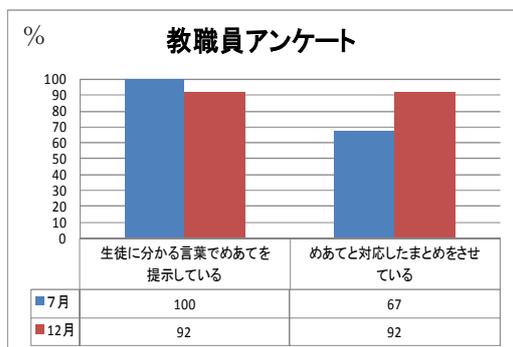
○「基礎・基本」定着状況調査において課題となった設問の比較

「基礎・基本」定着状況調査において、平成 25 年度課題となった設問を 6 月と 2 月で比較すると、国語科の漢字の読みと書きの設問では通過率が向上しているものの、主語・述語の関係については通過率が 25%も下がっており、定着が図られていないことが分かった。また、数学科では、回転移動、図形の性質、文字式ともに通過率は向上しているものの、文字式については定着に課題が残る。さらに、英語科では、話の流れをつかみながら読んだり、語と語のつながりに注意して正しい英文を書いたりする設問では通過率が向上しているものの、情報をもとにして自分の考えを書く設問については通過率が下がっており、継続課題となった。



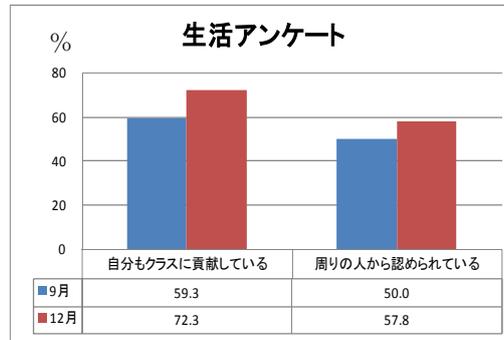
○教職員と生徒に対する質問紙調査の結果

意識調査の結果、9割以上の教師が「生徒に分かる言葉でめあてを提示している」という結果となった。教師が生徒の視点に立った言葉でめあてを提示することにより、生徒自身が授業の中で何を理解し、どのような力を身につければよいのかが明確になり、見通しをもって授業を受けることができるようになった。そのことにより、授業の中で「理解できた」を実感できた生徒が増加したものとする。

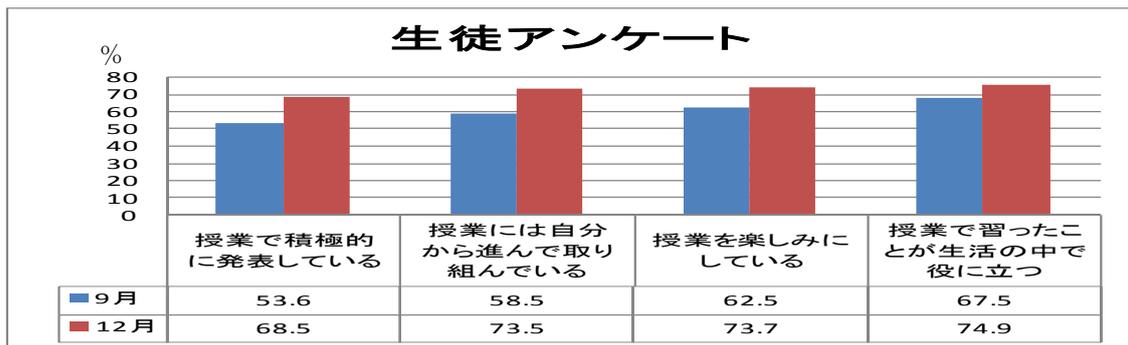


② 学習意欲の向上を図る取組

授業におけるペアトークやグループ学習等における組み合わせや編成を、Q-U学級満足度調査の結果を基に行うことにより、自信のない生徒においても安心して、積極的に自分の意見を言えることができたように思われる。生徒アンケート結果から、自己肯定感や自己存在感の向上が見られた。



また、授業で積極的に発表したり、進んで取り組んだりする等、授業に対する関心・意欲・態度に関するアンケートの9月と12月実施の結果を比較すると、12月の方が肯定的回答をしている生徒の割合が増加した。このことから、学習意欲が向上してきているものと考えられる。



③ つまずきの大きい児童生徒の個の変容

○授業場面における記述（ノート・ワークシート等）や態度の変容

「個人カルテ」に抽出した生徒に対して、スクールカウンセラーのアドバイス等を考慮した指導・支援を各教科担任が連携して行うことにより、授業でのノートに加え自主学習ノートにも変化が見られるようになった。英単語や漢字を書き写すだけだったノートが、文章表現や考えを記述するような、よりレベルの高い内容となってきた。

4 今後の課題

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた取組

- ・ 小中の接続を意識した授業スタイルの確立と、家庭学習の習慣化に課題がある。小中連携を意図的・計画的に行い、連続性のある授業スタイルをつくとともに、家庭学習では個々に応じた内容を実施できるように繰り返し指導していく。
- ・ 久保中検定についてその有効性を整理しきれておらず、英語科以外の教科において実施することができていない。基礎・基本の徹底につなげるよう英語科だけに限らず、他の教科でも実施できるように計画していく。

② 学習意欲の向上を図る取組

- ・ 「個人カルテ」を活用した授業改善の取組と生徒の学習意欲向上の相関を明らかにできていない。効果のあった声かけや手立ての要因を分析し、事例を蓄積していく。

③ つまずきの大きい児童生徒の個の変容

- ・ 「個人カルテ」に挙げた生徒の検証が十分でない。つまずきの状況を丁寧に分析し、どのような課題が改善されたのか継続的に見取り、一つずつ課題改善を図っていく必要がある。